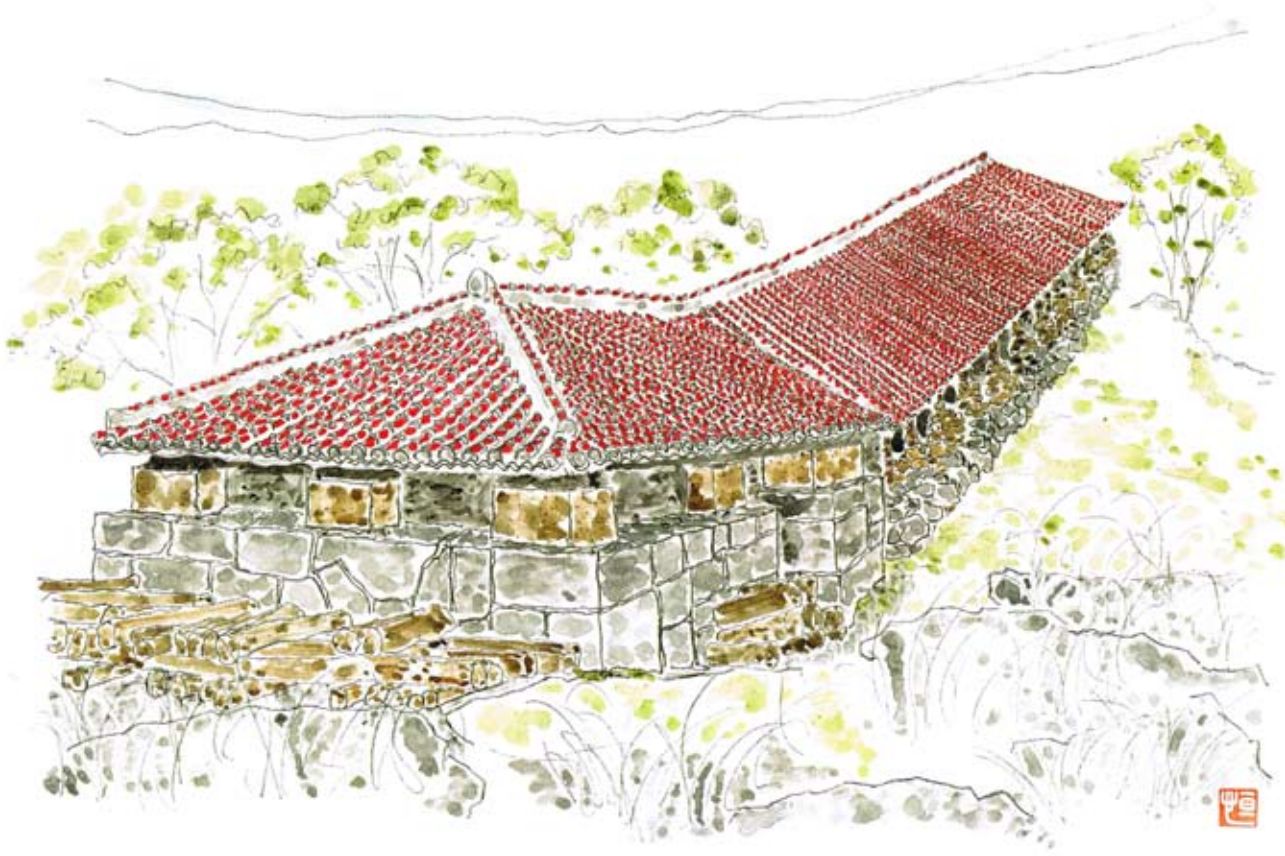
うちなぁ点描 第251回

# やちむん

文と絵・下地 恒 *Hisashi Shimoji*



タカエズトシコ氏の訃報を新聞で知った。

陶芸の技法を彫刻に発展させた先駆者として世界的に知られ、それまでアメリカにおいて芸術として認識の浅かった陶芸の価値を芸術の領域まで高め、アメリカ現代陶芸界において確固たる地位を築いた。さらに大学でも陶芸を教えるなど、教育者としても多大な影響を陶芸界に与えたと聞く。

氏と沖縄の繋がりは、具志川からハワイへ渡った両親を持つ沖縄系移民の二世であり、両親の郷里である沖縄に並々ならぬ想いを抱いていたという。そして昨年の今頃か、県立美術館にて「タカエズトシコ展―両親に捧ぐ」を開催。私も鑑賞した記憶がある。芸術は観る人それぞれ感じ方は違うと思うが、凛としたかっこよさと、そしてたくましさ、深い温かさが作品から伝わってきた。まさに生きものだ。

私が、やちむんという陶芸に出合ったのは、幼い頃から生活に必要な日用雑器として慣れ親しんでいたと思うのだが、芸術として身体に入ってきたのは大学を卒業したての頃かもしれない。ふと立ち寄った読谷にある「やちむんの里」。あの当時人里離れた場所にあり、ひとつの登り窯を中心に工房が点在していた。その幾多の棚に陳列された土のニオイをプンプンさせている陶器がズラリ。美しい光景が広がっていた。

釉薬をかけない荒焼（あらやち）が好きだ。装飾はほとんどされずカタチで勝負。火を入れて三日三晩、夜通しで炎を育て続ける。昇炎した炎がまとわりついた模様は意図して出来たものではなく、窯を焚き、焚き口から炎が吹き出し、1200℃の炎で包まれて付いた、神のみぞ知る美しき火跡なのだ。まさに芸術はバクハツだ。

陶器を焼く登り窯も建築学的に美しく芸術的であり、そこから生まれる陶器と相まって、まるで自然に囲まれた美術館のように佇む。その堂々とした風格は建築界においても吉田五十八賞にノミネートされたほどで、存在感がある（設計は故・洲鎌朝夫氏）。

壺屋焼は尚貞王時代の1682年、当時の陶業地であった知花、湧田、宝口などを現在の那覇市壺屋に移設統合したのが始まりといわれる。大正時代には民芸運動の先駆者、柳宗悦をはじめ浜田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチなどが幾度となく沖縄の壺屋を訪れた。伝統を守りながら生産される陶器は彼らから高い評価を受け、一躍壺屋焼は日本全国に知られるようになった。

沖縄県で最初の国の重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された金城次郎氏はいわずと知れた陶工の一人であり、浜田庄司、河井寛次郎らの指導の元で壺屋焼を守り、発展に努めた。那覇の壺屋には多くの焼き物店が軒を並べ、登り窯の跡などもあり、当時の繁栄を時間を超えて垣間見ることができる。琉球王国時代を経て、さまざまな歴史を乗り越えてきた沖縄の伝統文化のひとつ「やちむん」は、今でも脈々と受け継がれている。

誇り高き文化継承者の方々を偲び、今宵あたり、お気に入りのカラカラにて一杯（盃）・・・いかがですか。

●建築設計事務所
主宰：下地　恒（しもじ　ひさし）

**略歴**
1966年生まれ　宮古島市平良出身
1989年　大学卒業後、福岡の設計事務所在籍
1993年　匠設計入社　洲鎌朝夫氏に師事
2004年　Atelier DUG Architect（アトリエ・ダグ・アーキテクト）建築設計事務所を設立